

〔研究論文〕

剣とペンと台湾引揚者

— 松川久仁男にみる戦後沖縄の再建 —

菅野敦志

松川久仁男は、「剣（剣道家）」と「ペン（ジャーナリスト）」に代表される、米軍統治下の沖縄の再建に寄与した右派の論客・剣道指導者であり、台湾引揚者であった。松川は、国士館専門学校卒業後に徳富蘇峰の推薦を受けて渡台し、新聞記者から台北商業学校の剣道教師へと転身した。戦時中に補充兵を経験した松川は、敗戦により沖縄へ引き揚げ、沖縄剣道連盟を結成（初代会長）、琉球商工会議所勤務を経て、自ら保守系新聞を発行して右派言論のオピニオンリーダーとなり、「剣とペン」の両刀使いとして活躍した。武道の分野における台湾引揚エリートとして、松川は米軍統治下での沖縄経済と剣道の再建に尽力したが、国士館を起点として獲得していった、生き抜く力としての彼の「剣とペン」には、勝敗の結果に忠実に生きたリアリストとしての剣士の一面と、変化する時代と環境に適応しながら生存を図ろうとした柔軟さの両面が垣間見えるものであった。

キーワード：沖縄 剣道 国士館 ジャーナリズム 台北商業学校 台湾引揚者
松川久仁男

1. はじめに

松川久仁男（1909～99年、沖縄県剣道道場連盟会長、県剣道連盟顧問を歴任、剣道8段範士）は、米軍統治下の沖縄で剣道を復興した第一人者であるが、彼は同時に、台湾引揚者（台湾新聞社、台北商業学校勤務）でもあった。その一方で、沖縄経済界における松川は、琉球商工会議所専務理事・事務局長（1956～67年）や、沖縄経済新聞社社長（1970～76年）などを務め、政治的には「反共」の立

場から積極的な発言を続け、一貫して左派・革新批判を行った右派・保守の論客として知られた。そのため、松川については多方面からの検討が可能となるが、本稿では、台湾引揚者としての越境経験に着目しつつ、「剣（剣道家）とペン（ジャーナリスト）」に代表される松川の人生について、剣道家としての松川の生い立ち、台湾および敗戦後の引揚げまでの経験が、いかに戦後沖縄で活発な言論活動と戦後沖縄剣道の発展へと接続していったのかを、史料と遺族への聞き取りを基に考察を試みる¹。なお、本稿は武道の分野における松川久仁男という「台湾引揚エリート」と戦後沖縄の復興とのかかわりに特化して検討を行うが、戦後沖縄の復興と引揚げ保守系エリートに関する総論として位置づけられるものではない²。

2. 生い立ち、沖縄県立第一中学校から国土館専門学校へ

松川久仁男は1909年3月沖縄県国頭郡字奥間に生まれた。父親の清善^{せいぜん}は名護警察署管下の奥間駐在所に勤務する警察官であったが³、久仁男に続き長女の文子と次男の国春が生まれた後、大宜味村塩屋の駐在所・名護町屋部の駐在所に転勤となった（久仁男6歳）。警察退職に向けた準備を進めていた清善は、郷里の羽地村真喜屋に家を建てると、退職後に真喜屋で牛乳屋を営み始めた。

稲嶺尋常高等小学校卒業を控えていた松川は、近く創設予定であった沖縄県立第三中学校（以下、県立三中）への進学を考えていた。ところが、県立三中の創設が間に合わなさそうだと幸地新蔵校長の勧めで沖縄県立第一中学校（以下、県立一中）を受験し、合格した。当初は下宿だったが、やがて父親が家族全員を

1 松川自身の全著作20冊の入手に加え、松川が発行した『沖縄経済新聞』を参照し、ご子息で沖縄台湾会事務局長も務めた松川罔隆氏からも聞き取りを行った（2021年11月19日、25日）。なお、本文中の〔 〕内は引用者による。

2 「引揚エリート」概念を提唱する野入直美の説明によれば、それは「戦後社会を立ち上げるアクターとしての引揚者の、相対的な高階層とキャリアの継続性、能動性、そして彼らが戦後社会に与えたインパクトをとらえるための概念装置」、とされる。野入直美「「引揚エリート」とは誰か—沖縄台湾引揚者の事例から」蘭信三・川喜田敦子・松浦雄介編『引揚・追放・残留—戦後国際民族移動の比較研究』名古屋大学出版会、2019年、214-241頁。

3 ちなみに、国頭から国を取った「国雄」が本来の名前であったが、戦争で戸籍簿を含む一切が焼失し、久仁男の弟である善彦は、本来の「国雄」を「姓名学上良くない」と意見したため、新たに同音の「久仁男」に改名して届け出たという。松川久仁男『随筆と回想録—剣道六十余年』上之山印刷、1985年、251頁。



図1 1925年：国士館時代の松川（前列左1） 1962年：柴田徳次郎（右）と松川（左）
出典：松川久仁男『随筆と回想録—剣道六十余年』上之山印刷、1985年

連れて那覇に移住した⁴。

県立一中では、剣道師範であった高木太文治（愛知県出身）から稽古を受けた。松川は高木を「沖縄剣道の育ての親」と称し、松川以外にも、京都の大日本武徳会武道専門学校（3年制。以下、武専）出身の富川盛武、真謝孝正、前原信正を育てた⁵。高木の指導の下で県立一中の剣道部は沖縄県で優勝を飾るなど、輝かしい成績を収めたが、高木は後の沖縄戦で戦死したとされる⁶。

県立一中を卒業した松川は、武道（柔道・剣道）の中等教員養成を目的として1929年に設置された東京の国士館専門学校（以下、国士館）で学ぶこととなっ

4 松川久仁男『独立を忘れた日本』沖縄経済社、1988年、127頁。息子の囿隆によれば、久仁男が一中に入学した当初は下宿していたが、沖縄本島北部から南部の首里まで久仁男の様子を見に来た清善が、庭で薪割りをさせられている久仁男の姿を見て、長男が家事労働をすべきではないと、久仁男のために一家総出で那覇の泊に転居したという。沖縄の伝統的な家族観のなかで、久仁男は長男として父親から手厚く扱われ、他の兄妹と扱いは異なっていた。松川囿隆氏へのインタビュー。2021年11月25日。

5 なかでも富川盛武（1895～1938年）は武専剣道科第5期生として沖縄から同校に初入学を果たした。富川は、沖縄では主に県立第二中学校剣道教師の傍ら、沖縄県警察部巡査教習所師範、沖縄刑務所嘱託などを兼務し、沖縄県有段者会理事、武徳会主任教師となり、「沖縄剣道の先駆者」と称されたが、中国戦線において43歳（1938年）で戦死した。三十五周年誌編集委員会編『三十五周年誌』沖縄県剣道連盟、1989年、27-28頁。

6 松川、前掲書『独立を忘れた日本』、130頁。

た⁷。国士館を1934年に卒業した松川は、徳富蘇峰の推薦を受けて台湾にわたり、1934年9月に台湾新聞社記者となった。

松川の台湾行きは、徳富蘇峰が紹介した台湾新聞社入社がきっかけであった。松川が当初進学を希望していた満州国の一般官吏養成機関・大同学院不合格の旨を徳富蘇峰に伝えたところ、「台湾新聞社の重役で東京支社長に甥が居るが、社会勉強にもなるし、新聞社の記者として台湾に行つてはと推薦」を受けたのだという⁸。だが、この徳富蘇峰から台湾行きの斡旋も、元をたどれば徳富が国士館に講師として招聘されていたことによる知遇が可能とした。「もとより国士館専門学校は剣柔道の専門家養成の学校であった」⁹と松川が述べるように、彼は剣道を通じて国士館に入り、国士館で徳富蘇峰との接点を得たのであった。

母校・国士館が自身に与えた影響について、松川が「頭山満、徳富蘇峰、中野正剛、永井柳太郎、鳩山一郎など日本の錚々たる知名士が館長の招きで来校して講演などがあり、それらの人々と直接、接することができたのは学生に大きな影響を与えた」と記していたように¹⁰、国士館館長（1958年の大学昇格後は学長）であった柴田徳次郎を介して得た人脈が、松川が社会的上昇を果たすうえでの鍵となった。松川が柴田から受けた薫陶のみならず、列挙されている頭山満、徳富蘇峰、中野正剛、永井柳太郎、鳩山一郎など、国士館で得られた学びと人脈が彼の思想と方向性を左右したことからも¹¹、松川は著書の中でも母校と柴田への感謝を数多く書き残している。

3. 台湾時代—新聞記者（ペン）から剣道教師（剣）への成功経験

最初に奉職した台湾新聞社は台中市に本社を構えていた。当初は本社の整理部

7 戦前の武道教員育成は、東京高等師範学校と大日本武徳会武道専門学校に続いて設置された国士館の3校によって行われていた。本科は4年制で定員は100名（柔道50名、剣道50名）であった。詳細は次を参照のこと。佐藤宏拓穰「国士館専門学校における武道教員養成の研究」『武道学研究』第39巻第2号、2006年、27-37頁。

8 実際には、松川は国士館を出てただちに台湾へ行く決断をしたのではなく、満州国・新京（瀋陽）にある大同学院への進学を希望していた。だが、身体検査を担当した軍医から「君は寒い所には向かない」と言われ、国士館の推薦を受けていたが不合格となった。松川、前掲書『独立を忘れた日本』、136頁。

9 松川、前掲書『随筆と回想録—剣道六十余年』、260頁。

10 松川、前掲書『独立を忘れた日本』、133-134頁。

11 息子の圀隆も、明治大学在学中に松川に同行して柴田を訪ねたこともあったという。松川圀隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。

で勤務し、内勤、校正などを担当していたが、その間、台中武徳殿に行き剣道の稽古に励むようになった。1935年になると松川は台北勤務となり、社会部で警察まわりを、続いて裁判所および軍事担当となった¹²。剣道については、稽古場所を台北武徳殿に移すこととなった。松川は新聞記者をしながら台北武徳殿で稽古をしたが、台北商業学校の教師であった前田兼孝の誘いを受けて、同校の嘱託として剣道を指導するようになっていた



図2 1935年：全台湾中校剣道大会（台北武徳殿）で優勝した台北商業学校剣道部の部員と松川（後列右2）

出典：松川久仁男『随筆と回想録—剣道六十余年』上之山印刷、1985年

（武道教員専門学校であった国士館では無試験で剣道の教員免許状を取得）。妻の文子も、新莊郡の和尚洲公学校で教師をしていた¹³。

「台北商業学校で稽古をしているうちに、招かれて」新聞記者から剣道教師へ転身した以外には、ジャーナリストという職業を捨ててまで教師の道を選んだ具体的な理由は回想録には見当たらない¹⁴。ただ、そもそも国士館は中等学校養成を主な目的としていたことや、本科の国漢剣道科で学んでいたと思われる松川にとって、その転身は自然な流れであったのかもしれない¹⁵。戦前は柔道か剣道が中等学校で必修とされたため、実力者を必要とする学校側からの要請と、生活の重心を剣道に据えたい松川の心情が合致したと推察できる¹⁶。台湾時代初期は「剣

12 松川が担当した事件の一例としては、社会部では「基隆のバラバラ事件」（海軍出身の吉村恒次郎が情婦であった屋良シズと共謀して吉村の妻を切り刻んで基隆港に沈めた事件）、裁判所と軍事担当の時には「ジュノー号事件」などがあつた。松川、前掲書『随筆と回想録—剣道六十余年』、262頁。

13 安村賢祐『日本統治下の台湾と沖縄出身教員』大里印刷、2012年、328頁。

14 松川、前掲書『随筆と回想録—剣道六十余年』、264頁。

15 中等学校教員の養成が主な目的であった国士館専門学校の本科は国漢剣道科・国漢柔道家に分かれ、学生は剣道・柔道のいずれかを専攻として14時間、国語・漢文を主要科目として16時間を中心に学んでいた。氏家道男『相伝 国士館剣道』講談社、2020年、244ページ。

16 息子の囿隆によれば、松川は国士館で「国漢」（国語）の教師を目指し、台北商業でも「国漢」を担当していたと記憶する。囿隆の目には、父親は常に何かを書いている「物書き」としての印象が強かったという。松川囿隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。

とペンの二刀流」であったが、次第に松川の生活の重心は、「ペンから剣へ」移行していった。

松川自身も「台北商業はもともと全国中校剣道大会に台湾代表として度々出場した伝統ある学校で、むしろ私の剣道修業の場となった」と述べており、「日曜祭日もなく生徒達と稽古をはげんだ」彼にとって、剣道こそが生活の中心となっていた¹⁷。

特記すべきは、台湾の剣道指導者、とりわけ学校関係者に国士館出身者が多かった点である（表1を参照）。国士館出身の剣道専門家が多数を占めていた台北商業は、上述の通り剣道強豪校であったが、全日本選抜台湾予選大会では1934年から1937年まで4年連続で優勝を飾っていた（松川は1936年から専任）¹⁸。未踏の“外地”であった台湾で、母校・国士館の武道（剣道）ネットワークで結び付いた仲間の存在は、松川に自身の居場所と安心感を与えたと思われる。

表1：松川久仁男が台北商業在籍中の学校関係の剣道指導者

在任校	氏名	段	出身校
台北一中	甲田盛夫	教士	武専
	加藤高	5段	国士館
台北高商	横田正行	5段	東京高師
台北商業	前田兼孝	5段	東洋
	広松梅太郎	5段	国士館
	松川久仁男	未確認	国士館
	岡部千葉男	5段	国士館
	吉田信吾	5段	国士館
	山之端松栄	5段	国士館
	下川益男	5段	武専
台北工業	加藤正義	5段	国士館
台北第二師範	小林千夫	5段	国士館
宜蘭農林	吉田次郎	未確認	国士館
基隆中学	仲谷勝	5段	国士館
嘉義中学	中村昇一	5段	国士館

出典：松川久仁男『随筆と回想録—剣道六十余年』上之山印刷、1985年、264-265頁。

ちなみに、剣道を介して得た知遇について、松川は以下のような新聞記者時代

17 松川、前掲書『随筆と回想録—剣道六十余年』、266頁。

18 松川、前掲書『独立を忘れた日本』、139頁。

のエピソードを紹介している。

また、当時荻洲立兵参謀長に、私が台湾軍に強い剣士はいないと言ったことから、君は剣道をやれるのか、じゃ部隊の者を司令部に集めるからやってみろということになり、手合わせをしたことがあった。しかし私は国士館を出たばかりの剣道専門家であり、しかも多人数相手ということから突きで攻めたところ、軍人達は参ってしまったが、それが縁となり寺内寿一軍司令官の官邸に呼ばれてご馳走になったこともあった。¹⁹

荻洲立兵参謀長は台湾軍のナンバー 2、寺内寿一司令官は台湾軍トップの人物であり、この二人に剣の実力を認められた意義は大きかった。しかも、松川は日本の武道である剣道を用いて、本土出身者のみならず、特権的階級に位置付けられていた軍人をも唸らせた。この松川のエピソードに象徴されるように、沖縄出身者であっても、日々の鍛錬を怠らず、実力本位で相手と対等に渡り合えるのであり、強さの獲得によって他者との壁は乗り越えられるとして、彼の自信は剣道を通して揺るぎないものとなったはずであろう。

剣道は松川にとって肉体および精神修練の重要なツールに止まらなかった。松川が台湾時代に獲得した人脈や経験は、剣道を介して得られただけでなく、沖縄と日本本土とのつながりを確認し、切り離すことのできない紐帯を実感するうえでも、剣道は彼の精神的支柱として、肉体のみならず精神を形成していったと思われる。

松川は戦後の沖縄で、後述するように剣道を介した本土との“全日本”対抗試合を計画・実施したが、日本人として生き、日本人として復帰を求める心情はこうした戦前の経験の上に立脚していたと推察できる。台湾での「剣（剣道家）とペン（ジャーナリスト）」の成功経験は、松川が戦後の沖縄の剣道界をリードする人材となる堅固な土台を形成したのであった。



図 3 寺内寿一台湾軍司令官（前列中央）、荻洲立兵参謀長（前列左）と松川（後列左3）

出所：松川圀隆氏提供

19 松川、前掲書『随筆と回想録—剣道六十余年』、262-263 頁。

4. 補充兵、敗戦と引揚げ—“敗戦の学問”を学び、敗者として生き抜く覚悟

1937年に開始した日中戦争が泥沼化し、第二次世界大戦へ突入すると、当初連勝を続けていた日本軍もやがて劣勢に転じることとなった。戦況が悪化の一途をたどるなか、松川は34歳を目前にしていた1943年1月に臨時召集により台湾歩兵第一連隊に入隊し、補充兵部隊として軍事訓練を受けることとなった。6カ月の訓練の後、松川は台湾を離れ、シンガポール、ジャワを経由してチモール島の守備を担当した。日本がポツダム宣言を受諾して無条件降伏するまでの間、松川は自身の現地経験の記録を残している²⁰。

松川の台湾経験で得た人脈は戦地の彼を精神的に救い、台北商業での教師経験は各地での偶然の再会を介して松川を助けた。松川はチモールでも何度か台湾での知人に遭遇し、偶然の再会を喜び合い、精神的に慰められたという²¹。敗戦後、松川は1946年7月に広島県大竹港に上陸して召集が解除されたが、引き揚げ直後に上陸した港で消毒を受けた時の再会の記憶が次のように記されている。

その時、消毒していた一人の係官が「先生、松川先生ではありませんか」と声をかけてきた。はじめての土地であり、知人がいるはずもなく、誰だろうと、びっくりしていると「私は台北商業出身で、剣道部にいました兼松と同期です。今日はここで御泊りのはずですが、同期生が数人いますので、後でうかがいます」と、敬礼してさっさと行ってしまった。²²

その後、松川を台北商業の卒業生3人が訪ね、松川を囲んでの夕食会が開催された。松川は、「この時ほど教師としての幸福、ありがたさを感じたことはなかった」、「翌朝は、偶然にも昨日話しにでた金松くんが訪ねてきて『先生』、と体にだきつかれたのには驚きもし、涙がでるほど嬉しかった」と述べ、台湾時代に得た縁に対する感謝を繰り返し強調していた²³。あくまで筆者による推察の域を

20 松川久仁男『補充兵日記』泰流社、1979年。本書は松川が従軍中に毎日あらゆる紙に書き残した情報をまとめたものであり、いかなる状況でも記録を怠らなかつた点は、台湾での新聞記者経験が培った一つの成果として捉えることもできる。松川圀隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。

21 例えば、微熱と体調不良に見舞われた松川がオヒブラの兵站に入院した際、「裏の外科入院中の台北東門郵便局に勤務していた石垣という顔見知りの人」に会い、「こういう所で、少しでも旧知の人と会うことは嬉しいことである」、「今後は言葉を交わし慰めあうことができるであろう」と書いている。同上、115頁。

22 松川、前掲書『補充兵日記』、148頁。

23 同上、149頁。

越えないが、松川にとっての台湾経験の一つの収穫とは、記者時代もさることながら、台北商業の教師となって得た人脈だけでなく、教育そのものの喜びに対する気づきが指摘できるのではないだろうか²⁴。松川は戦後の沖縄で再び学校教師となることはなかったが、自宅で剣道塾を開き、少年剣道の発展に大きな貢献を果たした。この背景には、台湾での剣道教師の経験が影響を与えたのかもしれない。

先に引揚げていた松川の家族が四国にいることは、台湾から熊本に引揚げを終わっていた大田政作（台湾で澎湖庁長などを務め、戦後沖縄では第三代琉球政府行政主席に就任）によって知らされた²⁵。大田政作は沖縄出身台湾引揚げエリートを代表する人物であるが、松川は台湾の沖縄県人会でこうした戦後沖縄の再建を担う人々との人脈を構築していた。徳島県貞光町（現：つるぎ町）に向かった松川は、妻の父と長男・囿隆との再会を果たした後、大阪で妻と次男と合流して1945年11月に家族を連れて沖縄へと帰郷した。中部の天幕小屋（俗称：インノミ、ヤードイ）に収容された後、松川の両親の故郷である羽地に向かった。

だが、北部では仕事がないため、1947年2月に那覇へ赴き、奥武山の那覇港湾作業隊に入所して米軍専用となった那覇港の荷揚げ作業に従事した。その具体的な業務内容は、奥武山公園内の陸上競技場に天幕小屋を作って軍や民間へ配給する衣食住にかかわる物資の揚陸、管理であった²⁶。この間（1947年2月～52年5月）、松川は那覇港湾作業隊キャンプ課長を務めたが、その時の隊長は沖縄最大ゼネコン・国場組の創業者である国場幸太郎であり、松川は国場とともに同業務に従事した。

なお、日本の敗戦をめぐっては、松川は次のような心情を吐露していた（下線は引用者）。



図 4 1940年：台北沖縄県人会での松川（前列右）

出所：松川囿隆氏提供

24 戦後には、松川自身も本土に戻った台北商業時代の元同僚教員を頻りに訪ね、台北商業での教え子が沖縄にいる松川の元に集まるなど、変わらず親交を深めていたという。松川囿隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。

25 同上、150頁。

26 同上、152-153頁。戦後初期に特別に設置された「みなと村」（1947-50年、初代村長は国場幸太郎）については、さしあたり次を参照のこと。謝花直美『戦後沖縄と復興の「異音」—米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』有志舎、2021年。

…私はチモールからジャワへと退却、やがて敗戦となり、抑留生活、インドネシアの独立運動、ジャワより日本へ、更に沖縄へと帰還したが、そのうちにこの戦争が、いかに無謀、悲惨なものであったか、米国に比較にならない機械、物資力の弱さなどがみられた。

しかし、敗戦の苦痛も大きかったが、“負けるは勝ち”という言葉もあり、日本及び沖縄にとって、不幸中の幸いだと思われたところもあった。今後、敗戦の学問ということをお忘れずに、その経験を生かしてゆくことは大切なことだと思われる。²⁷

ここで示される「負けるは勝ち」の思想（敗戦の学問）は、松川が繰り返し述べていた点であった。剣の道を精神的な支柱としていた松川が、敗者となった経験をいかに捉えて、何を見出そうとしていたのか、その理解は重要であろう。間違いを恐れずにいうならばここからは、敗戦後の松川が、眼前に広がる現実の世界——勝者としてのアメリカと、敗者としての日本、沖縄——のなかで生き延びる方策を「敗戦の学問」から模索しようとする決意を読み取ることができるように思われる。

「負けるは勝ち」とは、武道家として、敗者となった認識に立脚しつつ、敗因を見極めてしたたかに生き抜く術を勝者から学ぶという、彼がこの戦争で得た一つの大きな教訓であったのではないだろうか。

5. 戦後沖縄経済の再建—琉球商工会議所での勤務と台湾ネットワーク

那覇に居を移し、那覇港作業隊キャンプ課長として多忙を極めた松川は、那覇市天久の自宅付近にも木工所として使用されていた土地も所有していた²⁸。当時の松川の生活の重心は、「剣からペンへ」であった（次節で述べるが、松川が再

27 同上、125頁。

28 台湾鉄道在職時に剣道の試合に出た時の審判長が松川久仁男だったと回想する松下義丸は、「那覇の天久、現在の琉球新報の所にあった松川久仁男さんが経営する松川木工所には、奄美で大工の棟梁だった妻の父が自分の弟子を5人ばかり連れて働いていました」との証言を残している（松下義丸「笠利から台湾、戦後沖縄へ」浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史 証言・資料編』浦添市教育委員会、2014年、176頁）。だが、松川圀隆によればこれは事実誤認で、松川は自宅から400メートルほど離れた場所を貸し出していたに過ぎず、そこで経営していたのは松下の妻の父親か別の人物で、「松川木工所」という名称は松下の記憶違いであるという。とはいえ、ここにも台湾時代の剣道による知遇が、戦後の沖縄で再び接合する様子が見て取れる。松川圀隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。

び“剣”＝剣道の武具を入手できたのは1950年のこと）。息子の圀隆の記憶では、松川はB4サイズの裏表のガリ版の新聞を自宅で刷り、那覇で販売しており²⁹、松川の経歴にも、沖縄新聞社・琉球新聞社で業務局長を務めたとある³⁰。戦後初期沖縄では幾多の新聞が登場していたが³¹、ここでは台湾時代の新聞記者としての経験が、戦後初期沖縄で大いに発揮されたのであった。

1954年7月に、松川久仁男は「沖縄経済のたて直しは商工会議所ごと、間もなく琉球商工会議所に入所」した³²。琉球商工会議所（その後、那覇商工会議所に統合）³³に入所した松川は、調査部長（1954-56年）、1956年から専務理事、

29 息子の圀隆は、当時小学校5年から6年ごろ（1947-48年）、那覇中を歩いて集金にまわったと記憶している。新聞名は記憶にないものの、部数は約200-300部、発行期間は2年ほどで、沖縄の主たる企業や団体に配布したという。ただ、この新聞は松川が中心ではあったが、発行責任者は松川ではなかったという。松川圀隆氏へのインタビュー。2021年11月19日、25日。

30 1952年に琉球新聞社業務局長となったほか、琉球貿易株式会社常務の経歴も確認できるが、これらは1970年代以降に出版された刊行物には掲載されていない。沖縄タイムス社編『現代沖縄人物三千人』沖縄タイムス社、1966年、616頁。

31 沖縄の二大新聞は『琉球新報』（1945年創刊、『ウルマ新報』→『うるま新報』→『琉球新報』）と『沖縄タイムス』（1948年創刊）であるが、その他にも、『沖縄毎日新聞』（1948年創刊、1954年廃刊）、『沖縄ヘラルド』（1949年創刊、その後『沖縄新聞』→『沖縄朝日新聞』→『沖縄新聞』となり1957年廃刊）、『琉球日報』（1950年創刊、『沖縄日報』→『琉球新聞』となり1955年廃刊）などの新聞が存在した。吉岡至「戦後沖縄における新聞ジャーリズムの営為と思想—『琉球新報』と『沖縄タイムス』と事例として」『日本の地域社会とメディア』第154号、2012年3月、47-84頁。

32 松川、前掲書『補充兵日記』、271-273頁。

33 沖縄における戦後の経済団体としては、1950年に再建された沖縄商工会議所が1951年に琉球商工会議所（旧）に改称された。一方、那覇地域では那覇商工会議所（旧）が1958年に創設され、会員700名を数えるまでになったが、両団体の会員重複が問題となったため、1963年にはいったん両者は統合され、那覇商工会議所（新）が発足した。力関係としては、会員数の多い那覇商工会議所（新）の会頭が琉球商工会議所（新）を兼務していた。なお、琉球商工会議所については、沖縄各地（本島以外）の商工会議所の連合体という形態で琉球商工会議所（新）が発足したが、1972年の本土復帰により翼下会員が減少したため1975年に解散し、代わりに沖縄県商工会議所連合会が設立された。秋山道宏「日本復帰後沖縄の「豊かさ」をとらえる視座」平良好利・高江洲昌哉編『戦後沖縄の政治と社会』吉田書店、2022年、125頁。那覇商工会議所編『那覇商工会議所55年史』那覇商工会議所、1982年、316頁。

事務局長を務め、1967年8月に退所した³⁴。沖縄の二大紙（『琉球新報』・『沖縄タイムス』）とは異なる保守的言論および主張を拡散させるため、1970年には保守系新聞『沖縄経済新聞』（1968年から2年ほど存続した『沖縄時報』の後継にあたる）を創刊した。

米軍統治下における沖縄の復興の過程と松川久仁男を見たとき、やはり台湾経験者とのネットワークが見てとれる。そうした人脈には、台湾からの直接のつながりでは、台湾総督府で法院検察官や澎湖庁長を務め、第三代琉球政府行政主席となった大田政作や、台湾総督府情報部から沖縄民政府芸術課長や琉球放送局長を務めた川平朝申などがおり、両者はともに松川の著書に推薦文を寄稿している。

一方で、引揚者ではないが、仕事上および台湾との民間交流関係でも密接な関わりがあった者として、先述の国場幸太郎と、セメントを始めとする多業種で起業し、成功を収めた宮城仁四郎がいた。港湾作業隊、那覇港作業隊での古くからのつながりもあって、当初は国場幸太郎と関係が深かった。松川は、国場が1972年に創設して会長の座に就いた沖縄県防衛協会（自衛隊への理解促進、防衛思想の普及を目的）では副会長を務め、国場の後に5年ほど会長を務めた³⁵。ちなみに、自衛隊に限らず、米軍政下時代には相手が米軍の上層部であっても、へりくだることなく、態度を全く変えずに接していた父親について、圀隆は以下のように回想する。

とにかく物おじしない、というのはすごかったですね。自衛隊のトップが交代するでしょ。その時に会って話ししてるの見て、ごく自然で。自分〔父親〕は〔戦時中〕伍長までしかなかったですからね、戦争時は。それでも、普通の人と話ししてるような感じで接していましたからね。例えば、アメリカの第七艦隊のカール・ビンソン（Carl Vinson）という航空母艦があったんですがね、その艦長なんかに、「やあー」と肩たたきながら（笑）。人に対してまったく物おじしなかったですね。³⁶

ところで、松川がいた頃の台湾は日本領であったが、日本敗戦後は中華民国の一省に変わった。1949年の国共内戦に中国国民党（以下、国民党）が敗退すると、中華民国の中央政府が台北に遷都する。蔣介石は「大陸反攻」を叫び続けた

34 松川自身による「履歴書」は次を参照のこと。松川、前掲書『随筆と回想録— 剣道六十年』、287-292頁。

35 松川圀隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。なお、自身の「履歴書」によれば、同じ1972年から沖縄自衛隊友の会では会長も務めていた。同上、292頁。

36 同上。

ものの、中華民国は事実上、台湾と福建省の島々に限定されることとなった。沖縄が琉球として米軍統治下に置かれ、台湾が中華民国に「復帰」して境界線が画定されたとはいえ、沖縄は台湾との経済的な結びつきを必要としていた。国民党にも「琉球」を独立の方向へと導くことで自国側に引き付けておきたい思惑もあった。一部には蔡璋（喜友名嗣正）のように、国民党側に立ち、台湾（中華民国）に属する形態で琉球独立を模索する人物がいたが、蔡のように独立運動に身を投じずとも、少なくとも台湾経験を有する人材には、台湾側との密接なつながりを維持するうえでの期待がかけられていた。

そもそも、台湾側では 1958 年 3 月に中華民国と沖縄の間の民間形式による交流窓口として「中琉文化経済協会」が組織され、日本語を介する方治が理事長を務めていた。対する沖縄側政財界人士の対台湾窓口組織には、前年の 1957 年 11 月 9 日に同名での「中琉文化経済協会」がすでに設置されていた。この「中琉文化経済協会」は、台湾省琉球人民協会理事長の肩書を有する蔡璋が台湾から沖縄を訪れたときに、「中琉相互の信頼と友好的団結により中琉貿易の促進、文化経済の交流を図り、双方の互恵的発展に寄与するという目的」により組織され、会長は富原守保、副会長は大宜味朝徳、事務局長は与世山巖、顧問は神村孝太郎、瀬長浩、渡嘉敷真睦、国場幸太郎であった³⁷。

同組織がどれほど活発に活動していたのかは定かではないが、その 8 年後である 1965 年 2 月 8 日には、沖縄で財界人を中心とした新たな対台湾窓口組織として「中琉協会」が設立されることとなる³⁸。設立総会では、約 30 名の関係者によって那覇商工会議所会頭の宮城仁四郎が初代会長、与世山茂と松川が副会長に

37 同協会の事業として示されていた事項は次の通り。

①中琉の諸問題の解決に就き中琉政府への陳情具申、②中琉貿易の促進、③中琉相互の文化経済の交流、④視察旅行及び取引の斡旋、⑤相互の学術文化の研究、出版、宣伝及び学徒の交流、⑥各種展示会及懇親会の開催、⑦その他本協会に於いて必要と認むる事項

神村孝太郎「中琉文化経済協会の設立」『今日の琉球』第 2 巻第 1 号、1957 年 2 月、7 頁。

38 これについて、赤嶺守は「中琉文化経済協会」は 1965 年 2 月 9 日に「中琉協会」に名称変更されたとする（赤嶺守「戦後中華民国における対琉球政策— 1945 年～ 1972 年の琉球帰属問題を中心に」『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要』第 19 号、2013 年 3 月、44-47 頁）。一方、当時の新聞記事では中琉協会の「設立総会」が 1965 年 2 月 8 日午後に琉球商工会議所で開催され、設立にあたっては「経済人の間で昨年から準備を進めていた」と説明され、宮城仁四郎本人も「中琉協会の設立は（略）大きな意義がある」と述べていた。これらの報道からは、両者は名称では類似しているが、必ずしも直接的な継承性が意識されない組織体であったように推察される。『沖縄タイムス』1965 年 2 月 9 日、2 面。『琉球新報』1965 年 2 月 9 日、2 面。

選出された³⁹。松川は1965年から79年まで同協会の副会長を務めたが、台北商業学校の教師経験から、戦後の沖縄でもかつての台湾時代の教え子、知人や関係者と広く面識を有し、琉球商工会議所では沖縄経済を代表する人物にもなっていた。中琉協会も、少なからず宮城の影響下において発足した団体として考えられることから⁴⁰、松川の台湾引揚者としての立場は彼を中琉協会でも中核的な存在とさせ、宮城との親交をさらに深めたといえよう。

宮城仁四郎は松川の働きぶりを絶賛しており、例えば、商工会議所の会員になる者が依然として少なかった時代に、松川が「台湾の物産展を沖縄で盛大に催したり、ハワイ、韓国の会議所との交流を行ったり、松川氏の手廻しが大きかった」と記し、その功績を高く評価していた⁴¹。宮城は松川を「国防、自衛隊、皇室に関する事等、信念が強い」と述べ、「このことが一部からは風当たりも強く、私までも風当たりがあつたりしたが、然しそれは却って誇りに思った」と賛辞を送っていたほどであった⁴²。そうした松川の一途な性格は、松川の商工会議所の退所の経緯にも見られる。業界間の力関係の変化（建設業・観光業と工業の対立）は、商工会議所内部の対立をもたらし、大東糖業社長であった宮城仁四郎が那覇商工会議所会頭となった1965年以降、周囲が新会頭候補として国場組社長の国場幸

39 同協会の事業計画として示されていた事項は次の通り。

①中琉間相互の経済文化にかんする諸情報の交換およびあつせん、②見本市の開催、③観光案内、④貿易のあつせん、⑤中琉政府刊行物の交換、⑥中琉児童作品の交換、⑦相互理解のための訪問団の交換

『琉球新報』1965年2月9日、2面。

40 宮城の評伝では、「仁四郎は会頭就任の初仕事として、貿易の拡大をはかり、台湾への輸出拡大と親善を目的として、中琉協会を商工会議所内に発足させている」とある（宮城仁四郎回想録刊行委員会編『業に生く一宮城仁四郎企業編』琉展会、1996年、214頁）。那覇商工会議所の記念誌でも、1965年1月に宮城仁四郎が那覇商工会議所会頭に選出された記述に続いて「中琉協会発起人会」の記載があり、7月には「中琉協会第1次訪問団出発」との記載があることから、中琉協会は宮城の影響下において発足した団体であった（那覇商工会議所編『那覇商工会議所60年のあゆみ』那覇商工会議所、1987年、15頁）。台湾の国民党機関紙『中央日報』では、同会会長としての宮城の台湾訪問が写真付きで報道されるほどの扱いであった。『中央日報』1973年1月19日、第3版。

41 宮城仁四郎「序文」、松川、前掲書『独立を忘れた日本』、46-47頁。また、琉球商工会議所の建物も、松川がハワイ等へ赴いて集めた寄付により建設が実現した。松川囿隆氏へのインタビュー。2021年11月25日。

42 同上。

太郎をかつぐ動きが起こり、1967年は一騎打ちの会頭選挙へと発展した⁴³。だが、松川は「現会頭の宮城さんを捨てて国場さんにつくことはできない」と、宮城支持の態度を固持した⁴⁴。結局、中小企業の支持を集めた国場が選挙で会頭の座を手にし、宮城は商工会議所会頭を1965年から67年までのわずか2年で退いたが、こうしたエピソードからも、日和見的不是な松川の性格の一端をうかがい知ることができよう。

6. 戦後沖縄剣道の復興に対する貢献—第8回全日本東西対抗剣道大会（1962年）

松川久仁男の戦後の「剣」についてであるが、彼の沖縄剣道界への貢献は絶大であった。日本本土では占領軍によって剣道は軍国主義的であるとして否定された⁴⁵。だが、松川によれば沖縄では特に禁止されるには至らなかったようであり、それは凄惨な地上戦で剣道具や道場など一切を失った状況下では、あえて禁止せずとも物理的に再開困難であったからかもしれない⁴⁶。他方、愛好者の尽力により、松川は1950年に剣道具の入手に成功し⁴⁷、1951年には同好者による稽古が再開された。松川は1953年8月に沖縄剣道連盟を結成し⁴⁸、沖縄剣道の再始動が実現した。その後は1968年2月まで、松川は15年の長きにわたり沖縄剣道連盟会長の座に就いた。

1965年に台湾・台北での開催によって開始した国際社会人剣道大会⁴⁹の琉球

43 秋山道宏、前掲論文「日本復帰後沖縄の「豊かさ」をとらえる視座」、102-103頁。

44 これは、当人同士による関係の変化よりも、国場を取り巻く人々の影響が大きかったようである。松川囿隆氏へのインタビュー。2021年11月25日。

45 日本では、連合軍によって敷かれた剣道禁止令により、“剣道”ではなく、竹刀を用いた新しいスポーツ剣道としての「撓（しない）競技」が剣道復活までをつなぐ存在として登場した。剣道の空白期間は、1952年10月に全日本剣道連盟が発足し、1953年に文部省が一般社会体育としての剣道実施を正式に認めるまで続いた。全剣連三十年記念史編集委員会編『財団法人全日本剣道連盟三十年史』財団法人全日本剣道連盟、1982年、18-40頁。

46 松川、前掲書『随筆と回想録—剣道六十余年』、275頁。

47 松川によれば、「昭和25年私が那覇市天久に住居していた頃、^{ママ}国士館の後輩後藤静利君が密航で剣道具を数組持ってきてくれ」、「昭和26年2月1日、民間貿易が始まったので撓競技用具などとりよせ警察の武道場で同好の者が稽古をはじめた」という。同上。

48 1953年11月には東京の国鉄職員会館で開催された全日本剣道連盟評議会で沖縄の加入が決議承認された。松川久仁男『沖縄剣道史』星印刷、1967年、7頁。

49 国際社会人剣道大会は、日本・台湾・琉球・韓国・アメリカの選手によって1965年から71年まで（全5回）開催された。三十五周年誌編集委員会編、前掲書、52-53頁。

団参加で団長を務めたように、台湾経験を活用しつつ戦後の沖縄剣道の復興に尽力した松川であったが、彼は少年剣道普及においても先駆者であった⁵⁰。1954年11月には剣道場尚武館（1962年7月に大道塾と改称）を設立して館長となり、三原に大道塾剣道場を改築して少年剣道の指導に努めた。また、1957年から1970年までは、沖縄刑務所の剣道教師も務めた。1965年には沖縄で初めて剣道8段に認定され、1971年には剣道範士の称号を授与された。

戦後の沖縄剣道史のなかで特記すべき松川の功績は、米軍統治下の1962年7月に彼が実現させた、第8回全日本東西対抗剣道大会（以下、東西剣道大会）の沖縄開催であった。東西剣道大会は、出場者も35歳以上6段以上の高段者に限定される、全日本剣道選手権大会と並ぶ最も権威のある大会である。初回大会は1940年に皇紀2600年を記念して宮崎市で開催され、戦後の第1回大会も1954年に同じく宮崎市で開催された。その後の大会には、沖縄からは松川久仁男が第1回と第4回大会に参加し、佐久川憲勇が第5回から7回大会まで連続出場していた⁵¹。

東西剣道大会の沖縄開催は、松川が個人的に交渉を進め、実現させたイベントであった。当初は松川が会長を務める沖縄剣道連盟ですら、資金捻出が困難な点を理由に理事の大半が最後まで反対を表明したため、「実現不可能」と思われていた⁵²。だが、松川は「第二次大戦で大きな被害を受けた沖縄住民のための大会開催」を各県の剣道連盟に手紙を出して支援を訴え、その訴えには各地から賛成と激励の反響が続々と届いた。「私財を投げうってでも」という松川の覚悟を前にして、沖縄県剣道連盟も開催に向けて動くこととなった。6千ドルが必要とされた開催準備資金も、琉球政府、那覇市、財界人による支援で問題は無事に解決をみた⁵³。

1962年7月23日、86名の選手団は波の上丸で那覇港に入り、日の丸の小旗を振る小中学生や那覇婦人会の歓迎を受けた。那覇港で歓迎のあいさつをした松川

50 松川は、「終戦後、抑圧された生活から、また自由民主主義という解放感からむしろ奔放になり、県民は戦果、パンパン、少年非行、犯罪の激増、怠惰と長幼、師弟、親子の秩序、礼儀も忘れ去ろうとしており、その歯止めは剣道でなければと考えた」と述べていた。松川、前掲書『随筆と回想録—剣道六十余年』、276頁。

51 第2回が名古屋市（1955年）、第3回が仙台市（1956年）、第4回が福岡市（1957年）、第5回が札幌市（1958年）、第6回が愛知県（1959年）、第7回が愛媛県（1961年）で開催された。松川・佐久川の両者ともに大会参加当時は7段であった。『沖縄タイムス』1962年7月17日、5面。

52 『沖縄タイムス』1962年7月18日、5面。

53 同上。

は、感謝の意とともに、今回の大会が「沖縄戦で散った 20 万英霊を慰め、さらに日本剣道の神髓を沖縄に紹介するもの」としてその開催意義を力説した⁵⁴。しかも、日本全土からの選手は、那覇港で米軍の陸海空三軍音楽隊による歓迎マーチで迎え入れられ、その軍楽隊の先導によって那覇の目抜き通り（琉球新報社前一国際通り—安里—首里）を行進曲の演奏とともに、バスとジープ 8 台に分乗してパレードした⁵⁵。沿道には 1 万人近い人々が建物の窓や屋上から歓声が上がり、拍手が鳴り、「バンザイ」と叫ぶ者もいた⁵⁶。前売り券は完売し、会場となった琉球大学体育館には観客が押し寄せたといい、本土から分かれて 17 年が経つ沖縄に大きな興奮を巻き起こした。

ちなみに、同大会の意外性は、米軍統治下の沖縄で日本の武道である剣道の「全国大会」が沖縄で開催されただけではなかった。スポーツ大会では国旗の掲揚と国歌の演奏・斉唱が慣例であるが、米軍統治下の沖縄ではこの点が問題として浮上した。米軍統治下で定められていた日の丸掲揚禁止規定は、同大会開催時にはかなりの程度において緩和されていたものの、それは決して無制限に認められるものではなかった⁵⁷。そうしたなか、キャラウェイ高等弁務官が来賓として登壇した会場では、星条旗の横に、掲揚が禁止されていたはずの日の丸が並んで掲揚されることとなったのである。とはいえ、開会式で日米両国の国旗と国歌のどちらを先にするのかは、結局直前になっても結論が出なかった。

だが、キャラウェイ高等弁務官が来賓として登壇した会場では、星条旗の前に日の丸が先に掲揚されただけでなく、米軍の軍楽隊がアメリカ国歌よりも先に日本の国歌を軍楽隊が演奏した。この予想外の展開には、日本側の出席者も「度肝を抜かされた」といい⁵⁸、この衝撃的な展開について、沖縄県剣道連盟の記念誌では以下のように説明されている。

54 『沖縄タイムス』夕刊、1962 年 7 月 23 日、3 面。

55 囿隆は、米軍側から歓待を受けた大会開催時の様子とその光景への驚きを、「首里の大通りを、アメリカの軍楽隊が揃って、最初に皆こう ... 先導して行きよったですからね。あんなのは、後にも先にも初めて」と回想する。松川囿隆氏へのインタビュー。2021 年 11 月 19 日。

56 『沖縄タイムス』夕刊、1962 年 7 月 23 日、3 面。

57 日本本土において 1949 年に日の丸が自由掲揚となった一方、沖縄の日の丸禁止令は一部例外を除き実質的に掲揚が禁止され続けた。1961 年には法定祝祭日に限定した掲揚が認められた。奥平一『戦後沖縄教育運動史』ボーダーインク、2010 年、148-159 頁。

58 松川、前掲書『沖縄剣道史』、155 頁。松川、前掲書『独立を忘れた日本』、154-156 頁。



図5 1962年：第8回全日本東西対抗剣道大会（琉球大学体育館）

左：日本全土からの参加選手団 右：キャラウェイ高等弁務官（中央）と大会名誉会長・大田政作（左2）

出典：松川久仁男『沖縄剣道史』星印刷、1965年

開会式で日米両国旗を国歌演奏のうちに掲揚するとき、どちらの国旗を先に掲揚するか、事前に長い時間をかけて各関係先に照会しても結論が得られないまま、その時刻になってしまった。腹を決めて予定通り軍楽隊に「アメリカ国歌吹奏」を連絡した。ところが軍楽隊の指揮者は「日本国歌を先にすべきである。米国歌を先にすることは礼を失する。どうしてもアメリカ国歌をやれと言うなら残念ながら演奏はせずに退場する」と連絡してきた。

そういうやりとりを知らされていない国旗掲揚係は、本番でドギマギしたりして、今から思うと笑い話になるが、潜在主権を保有する国と占領国と、どれを先にすべきか誰も判断できなかった。⁵⁹

公式上は“日の丸掲揚禁止”の米軍統治下にあつて、戦後沖縄における競技大会での日の丸掲揚はこれが初であつた。結果として、同会場では星条旗と日の丸が並んで掲揚されただけでなく、「潜在主権」を有する日本に米軍が譲歩する姿を多くが目撃する意義深い大会となつた。「沖縄の自治は幻想」と述べ、「キャラウェイ旋風」と呼ばれるほどの強権的な印象を与えていたキャラウェイ時代であつただけに、米国の次に日本ではなく、日本が優先されるという、こうした展開は全くの想定外であつた。なぜこのような決定が可能となつたのか。あくまで想定の外を越えないが、潜在主権意識の有無はさておき、“アウェー”から訪問する“ゲスト”に敬意を払う“スポーツマンシップ”の理念と理想の前に、米軍

59 三十五周年誌編集委員会編、前掲書、50-51頁。

側の“平等”が引き出されたのかもしれない。その他にも、物おじしない彼の性格によって構築された信頼関係が寄与した可能性もあるだろう⁶⁰。

松川も後に、武道のみならず、広くスポーツ界において「北海道から沖縄まで、一県ももらさない、全日本的行事が行われたことは、大げさではあるが有史以来この大会がはじめてだった」⁶¹と記している。琉球郵便からは、「第8回全日本東西対抗剣道大会記念」3セント切手が発行された⁶²。同大会は、「剣道が完全にアメリカ占領軍に認知された具体的な証」⁶³を作ったが、松川は剣道をもって実現不可能と思われた大会の沖縄開催を成功させただけでなく、異民族の統治者からも譲歩を引き出した。何より、松川はこの剣道の全国大会の沖縄開催を通じて、本土との紐帯の可視化および一体感の創出を試みたのであった。

7. 大国の“あいだ”で生きる—リアリストとしての松川の一面

一方、戦後の松川の「ペン」は、経済問題以外では、主として沖縄の「革新」勢力、とりわけマスコミや沖縄県教職員組合（以下、沖教祖）に向けられた⁶⁴。松川は、米軍基地、国旗・国家、天皇制、自衛隊に対して異議を唱える側に批判を続けた。ただ、そうした批判は、保守派からの支持は得られたとしても、沖教祖や革新勢力とは厳しい対立関係が続いた⁶⁵。

とはいえ、そうした松川の思想を「国粹主義的」と見なして一蹴する単純化も、一面的な理解に閉じ込めてしまう危険性を孕んでいるだろう。それは、異なる視

60 松川はキャラウェイの自宅を訪問して歓迎されたこともあった。松川圀隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。

61 松川、前掲書『沖縄剣道史』、155頁。

62 全剣連三十年記念史編集委員会編、前掲書、240頁。

63 三十五周年誌編集委員会編、前掲書、51頁。

64 そもそも、沖教祖の前身である沖縄県教職員会（1952年発足、初代会長：屋良朝苗）は、本土復帰運動に際して、日の丸掲揚、君が代斉唱、「共通語励行」（方言札の再活用を含む）を推進していた。だが、1965年から日本教職員組合（日教組）の影響が増大し、1969年に日本への施政権返還が決定すると、運動の方向性は変容をみせた。1971年に沖縄県教職員会は沖教祖に改組され、1974年には日教組に加盟し、日の丸掲揚・君が代斉唱反対といった日教組の取り組みに沿う方針をとるようになった。高橋順子『沖縄〈復帰〉の構造—ナショナル・アイデンティティの編成過程』新宿書房、2011年。

65 そうした批判の矛先は、著書のタイトルに明白であった。松川久仁男『日の丸は見えず赤旗のみ』沖縄経済新聞、1976年。松川久仁男『おかしな日教組—復帰後は日の丸反対』沖縄経済新聞、1981年。

座から見ると、リアリストとしての松川の姿が浮かび上がってくるからである。

一例としては、戦前の台湾経験および戦後の中琉協会での関与から、親密な間柄にあった台湾の国民党との関係変化があげられる。当初は、蒋介石の任命により中琉文化経済協会初代理事長を務め、沖縄側の人士からも絶大な信頼を寄せられていた方治とも、1972年の本土復帰をめぐる方の「米軍基地が完全撤去されれば安全、自由、民主は守られない」、「中共打倒せねば平和は達成できず」、「国民党による大陸奪還は近いうち必ず実現」といった主張を、松川は自身の『沖縄経済新聞』で紙面を大きく割いて紹介していたほどであった⁶⁶。共産党下中国への関心が中心を占めていた県内他紙では見られない、こうした方治＝国民党による主張の大々的な掲載からも、両者の関係は明らかに良好であった。松川は台湾訪問団にも参加し、総統・蒋介石にも謁見を果たしていた。「反共」の重要性を主張する松川にとって、中華民国・国民党支持は当然であるかに見えた。

ところが、1972年9月に日本政府が中華人民共和国と国交正常化を実現させると、「国民党支持」一辺倒ではない松川の姿勢が見られるようになる。国交正常化直後の10月7日には、松川は自身の『沖縄経済新聞』紙上で、「蒋介石の恩義忘れるな」と国民党政府を擁護しつつ、「日中悠久友好の願い」と題して、「日中平常化が生まれ、極東の緊張が緩和された」、「日中友好の一步をふみ出したことは両国民の喜ぶべきこと」と、「日中」の国交回復を全面的に評価したのであった⁶⁷。

中琉協会の副会長も務めた松川であったが、にもかかわらず、これ以降、彼は自身の新聞で、中華人民共和国を「中国」、中華民国を「台湾当局」と記載するようにもなった。1972年末には、一年を振り返り、「嫌なニュースばかり」だったが、「ただ一つのとりえは“日中国交正常化”だけ」と、国交正常化に対して明確に肯定的評価を下した⁶⁸。こうした松川の現実主義的な態度に対し、当然の如く国民党は敏感に反応した。松川はその後、国民党側から冷遇されるようにな

66 『沖縄経済新聞』1972年6月24日、2面。

67 『沖縄経済新聞』1972年10月7日、1面。

68 『沖縄経済新聞』1972年12月23日、3面。とはいえ、日中国交正常化の際、『沖縄タイムス』がカイロ宣言をあげて「尖閣、中国に返還か」と報道したのに対して、松川は外務省による見解を連載しながら、「もし尖閣が中国領土とするなら、沖縄は中国領土となるはずだ」と猛烈に反駁した。『沖縄経済新聞』1972年10月7日1面。『沖縄経済新聞』1972年8月5・12・26日、3面。

ったという⁶⁹。

また、復帰問題についても、1961年に刊行された松川による初の著作で、以下のような主張がなされていたことは注目に値する（下線、[]内は引用者）。

沖縄人は芋を食いはだしになっても早く復帰すべきだと説く者もいるが、それは好ましいとは思わない。では復帰反対かというところでもなく、日本復帰も結構、しかし沖縄の経済文化の福祉のうえにたった復帰である。復帰したとたん政治、経済、教育と日本内地人に握られ、沖縄人が足蹴にされるようではだめで、沖縄人のための沖縄にするにはどうしたらよいかということが何より肝要なことだと思いがどうかろう。すでに経済界には日本、香港、米国、台湾の資本、黒い手は沖縄に伸びつつあるのだ。（略）やはり沖縄の発展と福祉に全面的責任をもってもらう形態にせねばなるまい。つまり、沖縄人[が沖縄自身の発展と福祉を構築していく主体として存在感を高めていくため]の繁栄の沖縄を築かねばならぬし、早く世界を活歩できる安定経済と人材を作ることをすべてに優先させるべきだと考える。⁷⁰

日本の一部となった沖縄に生まれた松川は、東京で学び、植民者として台湾に居を移した。一方で、戦後の米軍施政下では被占領側の立場にありながら、「日米の谷間にあって米国でもない、また独立国でもない」琉球の経済面からの再建を目指した⁷¹。その松川が願っていたのは、沖縄人を主体として経済・文化・福祉における繁栄の享受を可能とさせる、「沖縄人のための沖縄」の構築であった。

冷徹な国際政治と冷戦という制限の下で生きる沖縄には何か必要なのか、松川は問い続けた。松川は、「戦前沖縄の政治、経済、教育は日本の他県人がほとんど握っていた」が、「戦後は、日本に代って米国が政治の中心点だけ握り、沖縄人にやらせ」た米軍統治下で「外資や日本人を含む外人進出の壁をつくり、沖縄人育成を図ってきた政策」が「日本一の貧乏県を引きあげ、沖縄人に自信をもた

69 松川囿隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。また、松川は自身の新聞に、「台湾人の台湾であるべき」、「台湾人は沖縄人自身で自らの運命を決定することができないように、極めて台湾人は悲劇、との仲村致彦による文章を掲載していた。こうした文章の掲載も、国民党からすれば絶対に容認できなかつたと思われる。『沖縄経済新聞』1971年7月31日、4面。

70 松川久仁男『琉球経済の発展—その希望と現実』アジア経営センター、1962年、255頁。

71 同上。

しめた功績」であったと、戦後生じた変化を肯定的に評価した⁷²。

だが、そうした「沖縄人のための沖縄」の構築とは、大国のはざまにおける自己の生存という現実から乖離することはなかった。松川は日本本土の経済誌などにも数多く寄稿していたが、ここでは「復帰」前年である1971年の日本評論社『経済往来』に掲載された「アメリカの沖縄統治」と題した論稿を見てみたい⁷³。そのなかで、「基地経済への依存は沖縄人が求めたのではなく、むしろ強制的にその枠組みに押し込んだアメリカと日本に責任がある」、「米軍の軍事支配体制に基づき沖縄人差別、優越意識によって沖縄の人権問題が引き起こされた」と主張する地元沖縄有力紙の社説を引き合いに出しつつ、松川は次のような指摘を行っていた。

米国の沖縄占領は、沖縄人の意思によらないなどという人もいるが、日本の無条件降伏の敗戦の結果である。もしそういう論法がとられるならば、沖縄は日本ではないというところから論議を進めなくてはな[ら]ぬと思う。今日ではあの灰燼の中の乞食同然だった姿を忘れ去り権利とか抗議とか気まま勝手なことを叫んでいるが、沖縄はもっと生きる道、社会のきびしさを考えるべきである。(略) 今日までの歴史をみて忍従のみに馴らされているといわれる沖縄人が、米国の統治で自尊心が養われ、日本が、世界を[前にして]胸を張って歩けるようになった。経済的発展に加えて、さらに大きな精神的収穫を得たといえよう。その意味から米国の沖縄統治は大きく評価されるべきことである。⁷⁴

松川は米軍統治下でいわれるような差別や優越感についても、戦前を振り返れば「むしろ日本本土人の沖縄人に対する差別感こそ大きく、搾取的でありいわゆる琉球処分だといわれる」と述べた。また、「アメリカに“出てゆけ”の声が出はじめた」が、「もしこれが米国でなくソ連が沖縄に進駐していたとするならば、[沖縄の現状は]どうなっていたであろう」と述べ、「日本のため、沖縄の利益」

72 同時に、松川は「沖縄の人は日本語がわからない」、「通訳なしで話ができ」ないといったような本土の人間が示す偏った沖縄認識をあげて「日本人の偏見を正せ」、「日本は沖縄の理解を」と訴えていた。松川久仁男『貧乏とはいふけれど』琉球文教図書、1965年、47-55頁。

73 松川久仁男「アメリカの沖縄統治—沖縄を再起、発展させたアメリカ統治」『経済往来』23巻7号、1971年7月、230-239頁。

74 同上、235頁。

に資する道を選ぶべきとした⁷⁵。

先述した、「“負けるは勝ち”」は日本と沖縄の双方にとって「不幸中の幸い」であり、「敗戦の学問」から「その経験を生かす」重要性を松川は説き続けた。資源に乏しい島の上でいかに生存を図り、貧しさから脱却できるのか——台湾であれ沖縄であれ、にらみ合う大国の間に挟まれつつも、松川には自身の生存空間を冷徹に観察し、自然資源や経済条件に乏しい沖縄をいかに地政学的な優位性に依拠して豊かにすべきかを模索していた、リアリストとしての顔を見ることができらう⁷⁶。

8. むすびにかえて—剣とペンと平常心

本稿では、米軍統治下の沖縄で剣道を復興した保守の論客であったと同時に、台湾引揚者でもあった松川久仁男について検討した。とりわけ、東京、台湾、そして敗戦後の引揚げを含む松川の体験が、戦後沖縄での剣道復興および言論活動——「剣（剣道家）とペン（ジャーナリスト）」——にいかにして連続していったのかに着目して考察を進めた。

沖縄から国士館に学び、台湾渡航後は記者として台湾新聞社に就職、その後台北商業学校で専任の剣道教師となった松川は、戦争末期には補充兵を経験し、終戦後に沖縄に引揚げると「剣とペン」の両刀使いとして活躍した。記者の職を得て、教師への転職を可能とさせたのも剣道であり、台湾時代に確立した剣道と文筆の「剣とペン」は、松川の人生を支える両輪となった。

松川は、大国のあいだで生き抜く戦略として、“負けるは勝ち”という「敗戦の学問」に徹した。台湾という“外地”を経験した松川の越境経験には、勝敗の結果に忠実に生きたリアリストとしての剣士の一面と、変化する時代と環境に適応しながら生存を図ろうとした柔軟さの両面が垣間見えるものであった。

1991年刊行の『沖縄県人名鑑』に掲載された松川が記した座右の銘は「平常心、一芸は万芸に通ず」、また、「一言メッセージ」には、「日本人らしい日本人になってほしい」と書き添えられていた⁷⁷。平常心とは、剣道修練で重要とされる、変化に動じない安定した精神状態を示す。松川は対外的には精力的に活動を

75 同上、231、236頁。

76 なお、戦後初期の沖縄には、比嘉秀平（1952-56年：初代琉球政府主席）などに代表されるような対米協力路線としての「現実主義」が確認できたが、そうした路線の転換過程については次を参照されたい。鳥山淳「破綻する〈現実主義〉—「島ぐるみ闘争」へと転化する一つの潮流」『沖縄文化研究』30号、2004年3月、113-156頁。

77 琉球新報社編『沖縄県人名鑑』琉球新報社、1991年、770頁。

続けたが、家族に見せる姿は対照的であった⁷⁸。家庭では言葉少ない松川の胸の内には、激動の時代を生き抜く平常心が強調される一方で、将来に対する憂いが秘められていたのであろうか。“沖縄人でありながら、日本人らしい日本人として生きる”ための方法を、松川は剣道に見出していたように思われる。

この「平常心」は、「鍛錬」とともに大道塾を支える二つの理念と定められ、松川は1999年7月16日に90歳で那覇の病院で死去した⁷⁹。同年、全日本の剣道大会で沖縄県代表のチームが初のブロック優勝を果たした。続く2年後の2001年にも同様にブロック優勝を勝ち取り、地元マスコミからは「偉業」と賞賛された⁸⁰。筆者は冒頭で、台湾引揚げエリートとしての松川が戦後沖縄の復興にいかなるかかわりを有したのかを検討するとしたが、総じていえば、松川が「ペン」で残した保守的言論や主張は、戦後初期には有効性を持ち得たとしても、変容し続ける沖縄の世論の主流を形成するには至らなかったかもしれない。だが、その一方で、3000人以上の門下生を育成した松川の「剣」の功績をみたとき、戦後沖縄剣道の復興と発展に残した足跡は忘れられることなく記憶され続けている。

【謝辞】

本稿の執筆においては、文献史料の提供を含め、ご子息の松川圀隆氏によるご教示および野入直美准教授（琉球大学）、匿名のレフェリーから多くの示唆を賜った。記して感謝の意を表したい。なお、本研究は、科学研究費補助金（課題番号：19H04357）による成果の一部である。

（すがの あつし・共立女子大学教授）

78 息子の圀隆によれば、父親は「この人大きな声出したらどんな声が出るんだろう」と思うほど常に無口で口数が少なかったが、80歳を過ぎたあたりからようやく口数が増えたという。松川圀隆氏へのインタビュー。2021年11月19日。

79 『琉球新報』1999年7月16日、3面。

80 『琉球新報』2002年5月19日、5面。